

武帝が戸口の増加を計つて異族招致の方針を取つたので、周知の如く晉の江統の徙戎論に述べたやうな、關中の人  
口百餘萬、華夷の率を見れば戎狄其の半に居るといふ光景を出現し、遂には永嘉の亂から五胡時代を招致し、江北  
は殆んど異族の支配下に置かれることになつた。これより後は支那、特に江北地方の漢族と外族との混淆は殊に著  
しく、混血の多くなつたことは想像に餘ある次第で、劉盼遂・王桐齡諸氏等の論述したやうに（女師大學術季刊第  
一卷第四期、第二卷第一期及び第二期參照）、隋室唐室の先世の如きも、多分に異族の血を引いてゐると思はれる  
有様である。試みに南北兩朝を統一した隋代の正史隋書の列傳を繰つて見ても、その中に收められてゐる人で、或  
は鮮卑の人、或は慕容氏、或は宇文氏、その他異族の出であることを明記せられるものゝ外に、自云、人、人也と  
か、何許の人なるかを知らずなどと記されてあるのが少くない。當時なほ系譜の重んぜられた時代の撰に係る此の  
書中に收められてある人々で、その出自を漢族に詐稱したものゝ多かつたであらうことは容易に想像せられること  
ろであるが、その外にかくの如く出自の明らかでないことを記されてある人々は、多くはこれを外族と見て誤らな  
いであらう。従つて當時異族にして政治文化の上に關與するものゝ多かつたことも推知せられる次第である。唐を  
經て契丹・女眞・西夏等の優勢時代、ついで支那全土が外族の勢力下に置かれることになつた元・清時代が現れた  
が、凡そ何れの時代を問はず、文化發展の方向が時の政治の權力に依つて規制せられるところの多いのは、古今東  
西を通じての常態である。さて此等の諸朝に於て政權を掌握した外族は、前述の如くその文化の程度は漢文化に比  
して著しく低く、支那と接觸を始めると先づその文化に同化し、一步でもこれに近づくことを以て自からの誇とし  
たことは、前述の如く蒙古民族を除く外比々みな同じであつたから、これ等の政權の立てられることに、その時代